

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	多機能型サービスあすも		
○保護者評価実施期間	令和8年 2月 27日		～ 令和8年 3月 16日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	17名	(回答者数) 14名
○従業者評価実施期間	令和8年 2月 27日		～ 令和8年 3月 11日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数) 6名
○事業者向け自己評価表作成日	令和 8年 3月 16日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	集団が個を育てる構造が出来て来ている	個別支援を基本としていますが、×孤立 ○自立 の視点で専門的知識を用いた計画を立案して実践し、評価しています。年数の経過とともに、利用児童達のソーシャルスキルも成長しそのスキルが新たな児童へ受け継がれていきます。互いを尊重し合い、空間・時間を共にする中で、豊かな学びの場が提供出来ていると感じます。	・思春期層に差し掛かってからの関わりにおいては特に、本人の意思や自己決定を尊重しながら、特性上の課題を踏まえ時間を多く掛けるように心がけていきます。 ・特性と性格/感情と行動は区別して思考し、集団の中の個としての有用感を感じられるようにします。
2	関係機関との風通しのよさ	関係機関の皆様と互いに顔の見える関係性を重要視しています。適宜、関係機関との電話連絡や担当児童の情報共有の場を設けさせていただいております。	・定期的に保護者も交えた面談や茶話会の開催等を検討しています。 ・支援は「長く」続いていくものです。対象児に相応しい支援先へのバトンタッチは迅速かつスマートに、必要に応じ関係機関に対応を受け渡すことも意識しています。
3	本人の理解度に合わせたシステム化	常に児童の「成人期」を考え関わっています。今必要(不必要)なこと/いずれ必要(不必要)なこと/ない方が良いこと等を判断しています。根拠のある予測を材料に、ロジックを組んだ支援をシステムとして本人へ浸透させていくイメージで教えます。	・支援者内の理解レベルの一致が必要不可欠です。全職員が「なぜそうするのか」の意図を正しく認識できるよう、役職者や児童発達支援管理責任者が適切な共有をしていきます。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	送迎時の添乗員不足 ※現在は保護者にご協力を要請し、到着次第外まで出てきていただく形をとることで車内が児童だけにならないようにしています。	送迎車の台数と乗車人数により乗り切れない場合が多いため。	・送迎車の数をふやす ・1便/2便等で送迎時間をずらし、限られた台数でも添乗員を含めた送迎業務を実施できるようにする。 ・お迎え可能なご家庭にはご協力を要請する。
2	稼働率の不安定さ	利用児童の学年や利用曜日に偏りがあり、曜日により受け入れ可能な日もあるが新規利用の相談は少なく、欠席が多い利用児童もいる為稼働率が不安定。また、17時以降の支援をしていないのでフルタイムで働く保護者にとっては利用検討の対象外となりやすい。	・児童の通所意欲の向上につながる活動の提供 ・中高生へ向けての支援力の向上 ・HPを活用してのPR
3	スタッフの定着	・児童に対し個別対応するために必要とされる支援者側の知識や対応スキルの獲得は簡単ではなく時間と経験を要するが、そこに至るまでに辞めてしまう職員もいる。 ・事業所スタッフそれぞれが同じ視点で児童に対する事が必要だが、その視点も個人差が出てしまう事がある。	・研修での定期的な学びの場を提供し、全体として一定の水準を保てるようにする。 ・余裕のある人員配置により職員の心身の安定を図る。